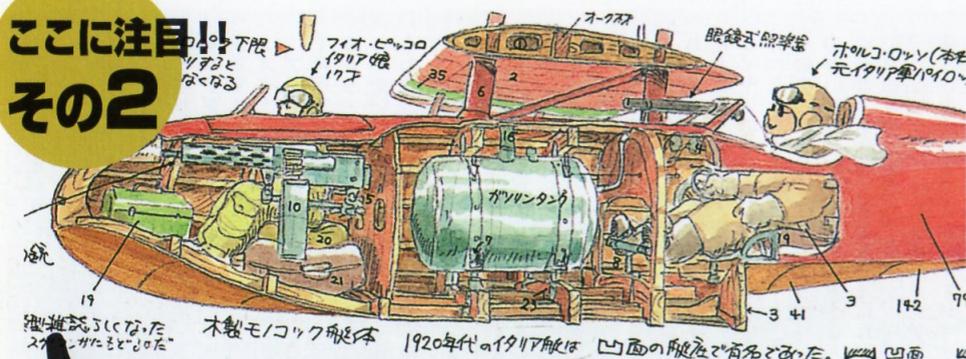


ここに注目!!
その1



▲翼構造。リブは合板を再現していて、場所によって肉抜き穴の形状を変化させるなどのこだわりが見とれる。より本物らしく仕上げようとした結果だ

ここに注目!!
その2



木製モノコック機体 1920年代のイタリア機は凹面の機殻を有名とされた。凹面

▲上は唯一の資料である(?)「飛行艇時代」の宮崎さんのイラスト(小社刊「宮崎 駿の雑想ノート」増補改訂版)に収録)だが、これをもとに多少のアレンジを加えた胴体内部。銀色の燃料タンクがよいアクセントになっている



Aéro-club "Nibariki" 2CV

二馬力飛行倶楽部

「リアルさ」と「妄想」の絶妙なブレンド

「紅の豚」のそうだった魅力にとりつかれた矢野氏が、サボイアS-21のデスクトップモデルがほしい!と考えるのは必然で、実際、ウイング・クラブのS-21デスクトップモデルの開発のきっかけになったのは、そうした矢野氏の想いだったようだ。S-21のモデルについて氏は「リアルさを追求することになるのだろうか?」

一方で、原作のイメージをも重視して製作してきたと語るが、その作業とはまさに、虚構と現実の狭間で遊ぶことに他ならない。宮崎監督に心地よくだまされた矢野氏が、今度は自分がだます側になって製品を開発する。そしてその間に、間違いなく多くの人がはまってしまっているのだ。

今回発売されたこのカットウェイモデルは、同社S-21シリーズのまさに集大成というべきものである。本物らしさにこだわりの抜いた細部表現と、原作の持つフィクションの要素とが見事に共存したこのモデルの魅力に、いったいどれほどの人が酔いしれることになるのだろうか?

■虚構と現実の狭間で……

デスクトップモデルの専門店、ウイング・クラブ代表の矢野雅幸氏は「紅の豚」を初めて観た際、劇中に登場する飛行機の、違和感のない自然な動きに大変な衝撃を受けたという。矢野氏はそれまでのアニメーションでの飛行機の動きに不自然さを感じていて、だから「紅の豚」でのサボイアやカーチスの、自然な、それでいてダイナミックな動きにショックを受けたのも当然のことだった。もちろん、劇中の飛行機の動き方にも、アニメーション特有の誇張された部分は存在するのだが、しかしそれらの「ウ」は、矢野氏のような生粋の飛行機好きをもうすんまり納得させてしまう高度な「ウ」だったというわけだ。そして矢野氏は、宮崎監督が仕掛ける虚構と現実との絶妙な尻に自ら入り込み、その中で心地良く酔いしれるという「大人」の趣味を理解する人の一人であったのだ。

久々の登場となる「二馬力飛行倶楽部」。間が開いてしまったぶん、というわけではないのですが、今回は超絶な逸品をご紹介したいと思います。それがこのウイング・クラブのサボイアS-21カットウェイモデル。胴体内部や翼構造など、本物らしさにこだわった精密な細部表現と、原作のイメージを大切にしたいアウトラインとが見事に融合した、まさに究極のモデルです。製品紹介に合わせてウイング・クラブ代表、矢野氏にお話を伺うことができましたので、そちらも一緒にお楽しみください

ウイング・クラブ: 03-3499-5124